ドイツにおける炭鉱跡地の活用と地域存続の戦略

世界遺産ツォルフェライン炭鉱の事例から

川副早央里

１．はじめに

2016 年３月 12 日、筆者はドイツ中部にあるドルトムントから電車に乗り、ツォルフェライン炭鉱跡を訪ねた。この日にドイツの炭鉱跡地に向かったのは単純なきっかけからである。筆者は、2011 年の東日本大震災以降、福島県いわき市において災害後の地域変容と原発避難について研究をしてきており、2016 年１月から３か月間フランクフルト大学で東アジアにおける被災者支援に関して研究交流する機会を得て、東日本大震災の発生から５年が経つ節目の日をドイツで迎えることになった。日本にいたら調査フィールドであるいわき市に行っていたと思うが、このときはそれができない。フランクフルトで被災地を思いながらおとなしく過ごそうかとも思ったが、思いついたのは、いわき市や双葉郡と同様に旧産炭地である地域に行くことであった。福島県浜通りは、炭鉱が閉山したのち、いわき市は観光業や化学産業に産業転換し、双葉郡は原子力発電所が誘致されて地域振興が図られてきた。では、同じく工業社会として発展してきたドイツにおいて、旧産炭地は今どうなっているのか。それを見に行こうと向かったのが、ヨーロッパの重工業発展期を支え、伝統的な技術と構造をもつツォルフェライン炭鉱遺産であった。まずは本稿がそうしたきっかけで訪れた訪問記であるために、まとまりのないフィールドノートになっていることをお断りしておきたい。

しかしながら、2001 年に世界遺産に登録されたツォルフェライン炭鉱遺産は、産業転換後の一つの地域振興策として産業遺構を活用していること、それが創造都市論をはじめとする文化政策や創造産業育成というドイツや欧州の大きな都市政策の流れの中で進行していることなど、日本における近代産業遺産の保存・継承とは異なる文脈でされており、都市政策論的観点からも、地域のアーカイブ化の観点からも非常に興味深い。

そこで本稿では、ツォルフェライン炭鉱が保存･継承されてきた経緯を確認したうえで、現地の訪問記として、炭鉱跡地が現在どのように利活用されているのかを紹介したい。

２．ツォルフェライン炭鉱とは

まずはツォルフェライン炭鉱の概要について述べておこう[1]。ツォルフェライン炭鉱遺産

[1] 以下、ツォルフェライン炭鉱の歴史については、ICOMOS(2001)、UNESCO World Heritage Convention(2001)、Stiftung Zollverein パンフレット ”Zollverein UNESCO World Heritage Site – The culture heart of the Ruhr Area“などを参照した。

は、ドイツ中部のノルトライン＝ウェストファーレン（Nord-Rheine Westphalen）州（以下、NW 州）に位置しており、州の中核的都市のひとつであるエッセンから電車で 15 分ほどの場所にある（図１）。ドイツにとどまらず欧州の工業化を支えてきたルール工業地帯が広がるエリアのなかにある。

図１　ドイツ国内地図

（出典：http://www.mapsofworld.com/germany/）

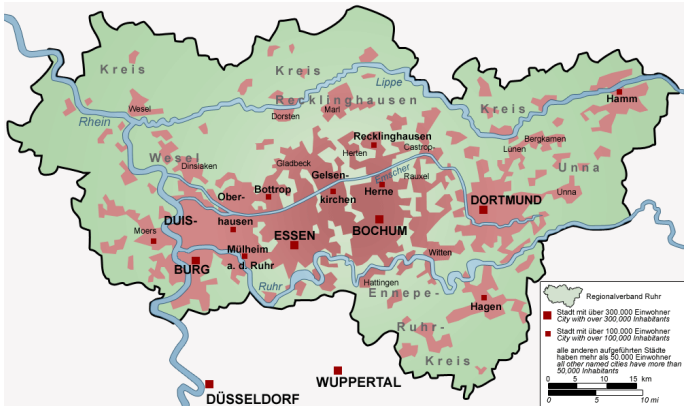

図２　ルール地方

（出典：https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%AB%E3%83%BC%E3%83%AB%E5%9C%B0%E6%96%B9）

この炭鉱は、エッセン郊外のカターンベルク地方で石炭層が発見された後、1847 年に企業家フランツ・ハニエル（Franz Haniel）によって操業が開始された。1851 年になると本格的な採掘が始まり、その後順々に新たな採掘坑が開かれていった。1900 年ころには、炭鉱労働者は約 5,000 人に上り、20 世紀に入ってからは 5,000 人から 8,000 人の間を推移していた。その後も、ルール地方において石炭および製鉄業が盛んになるとツォルフェライン炭鉱も発展していった。

さらに採掘量の増加を図るため、1928 年に建設的にも技術的にも一流の立坑を建設することになった。その設計を担ったのが、建設家のフリッツ・シュップ（Fritz Schupp）とマルティン・クレマー（Martin Kremmer）である。彼らは、当時影響力を持っていたバウハウス建築様式を用いて、後に「世界一美しい」と称賛される第 12 坑を 1930 年に完成させた。1932 年には稼働を開始し、ツォルフェライン炭鉱の坑内からの揚炭は第 12 坑に集約され、既存坑口は人員の入昇坑および資機材搬入の専用とし、生産体制の合理化を図った。それによって同炭鉱は日産 12,000 トンの生産能力を誇る世界最大の炭鉱となった。

第二次世界大戦後は、施設の改修が進められるとともに、1961 年には新たなコークス工場が操業を開始した。ここでは最大約 1,000 人が従事し、1 日に 8,500 トンのコークスを生産する能力がある最新鋭の施設であった。1970 年代に更なる拡大があり、ヨーロッパ最大かつ近代的なコークス工場となった。しかし、その後はヨーロッパの鉄鋼業が衰退してコークスの需要が減少し、1993 年に操業停止に至っている。炭鉱の経営については 1963 年からルール石炭会社に移されて継続されたが、最終的に 1983 年に操業停止の方針が示され、1986 年 12 月 23 日に操業終了を迎えることとなった。

３．文化的資源としての活用

炭鉱が操業停止になった後、炭鉱跡地はどのようにして現在のような文化的資源として活用され、世界遺産に登録されるようになったのだろうか。本節では、炭鉱の操業が停止した後の遺産化への経緯をみていく。

炭鉱とコークス工場が終わりを迎えた後、NW 州が炭鉱跡地を購入し、全体を産業遺産として保護の対象として土地整理を開始した。そして、ある意味で負の遺産となったこのエリアを観光資源化しようと取り組んだのが「IBA（Internationale Bauausstellung）エムシャーパーク・プロジェクト」である。IBA とは「国際建築博覧会」を意味し、「『アイデアの公募』『コンペティションによる計画選定』『プロセスの公開』を組み合わせて遂行する都市計画の手法であり、ドイツでは 1901 年から 1914 年にかけてダルムシュタット Darmstadt 市において 4 回開催された≪ドイツ芸術のドキュメント≫を出発点」（椎原 2014: 2）としている。「IBA エムシャーパーク・プロジェクト」は、ルール工業地帯のエムシャー川流域 800 万㎢における都市再開発事業であり、70 年代の炭鉱や工場閉鎖に伴う産業遊休地の出現や人口流出などの社会問題や土壌や河川汚染などの環境問題への対応として開始されたものである。州政府は 1988 年に「地域内の緑地と水系の保存・回復をはかり、雇用の拡大や、住環境の整備、近代化産業遺産の保存などを行う地域開発事業を公表し、資本金 3,500 万マルク（約 25 億円）を全額出資して 1989 から 99 年の時限的な組織である『IBA エムシャーパーク公社』を設立した」（椎原 2014: 3）。出資は政府が行っているものの運営は独立しており、公社の主たる業務はコンサルタント事業で、実際の各プロジェクト事業主体は自治体や企業、市民グループなどであった（椎原 2014: 3）。このプロジェクトでは、1989 年から 99 年までの 10 年間で 120 以上のプロジェクトが実施された。

「IBA エムシャーパーク・プロジェクト」の一環として保存活用が行われていたツォルフェライン炭鉱では、2001 年にユネスコによって第 12 坑、第１／２／８坑、そしてコークス工場が産業遺産群として世界遺産に登録された。この産業遺産群は、以下の基準を満たしたことで世界遺産登録されている。「（２）ある期間を通じてまたはある文化圏において、建築、技術、記念碑的芸術、都市計画、景観デザインの発展に関し、人類の価値の重要な交流を示すもの」「（３）現存するまたは消滅した文化的伝統または文明の、唯一のまたは少なくとも稀な証拠」という基準である（UNESCO World Heritage Convention, 2001）。委員会は、これらの建物について、「ヨーロッパにおける伝統的重工業の発展を象徴する」こと、特に「数十年にわたって近代産業建築の手本となったバウハウス様式の工業団地の建築」であることを称賛している[2]。

その後、2010 年になると、エッセン市を中心としてボーフム、エムシャーパークなどを含むルール地域が「欧州文化首都 European Capital of Culture」に選定される。この「欧州文化首都」とは、EU が指定した加盟国の都市において、１年間にわたって集中的に各種の文化行事を展開する事業」（椎原 2014: 10）であり、地域の経済的発展とともに文化活動の活性化が期待される都市政策である。2010 年にエッセン市で設定されたテーマは「変化する文化―文化による変化 Kultur durch Wandel－Wandel durch Kultur」であり、「『煙突が林立する地域』というルール地方の先入観を払拭し、文化による新しいイメージを作り出す

[2] Stiftung Zollverein パンフレット“Zollverein UNESCO World Heritage Site”より。

表１　ツォルフェライン世界遺産が誕生するまでの経緯[3]

年	出来事
1847	フランツ・ハニエル（Franz Haniel）が第一採掘坑を建設。
1851	初めて石炭が採掘される。ツォルフェラインがこの地域で最初の地下炭鉱となる。
1900	３か所の採掘坑を合わせて、5,355 人の労働者が従事。ツォルフェラインはルール地方において最も大きな炭鉱の一つとなる。
1926	ツォルフェラインが世界第二の規模を持つ鉄鋼会社 Vereinigte Stahlwerke AG の炭鉱となる。Vereinigte Stahlwerke AG はツォルフェラインで中心となる立坑を建設することを決定する。
1932	ツォルフェラインの第 12 採掘坑での採鉱作業が２月１日に開始。世界最大の採炭施設となる。良質な瀝青炭を１日 12,000 トン産出し、この施設ではルール地方の平均的炭鉱の３～４倍を生産しており、専門家の間では第 12 採掘坑は技術的傑作と称されている。その後の 30 年間、この炭鉱の建築はルール地方の産業建築のお手本とされた。
1961	第 12 採掘坑との空間的および機械的関連から、ツォルフェライン・コークス工場が稼働を開始する。1970 年代に生じた第二の生産拡大により、ヨーロッパで最大かつ最も近代的なコークス工場とされた。
1986	12 月 23 日にツォルフェラインの採掘坑が閉鎖。その前週に第 12 採掘坑は保存対象にされる。
1990	ツォルフェラインの第 12 採掘坑を世界の文化センターに転換するべく、改装と変換が開始された。
1993	６月 30 日、ツォルフェライン・コークス工場が解体される。
1996	カジノ・ツォルフェラインが、かつてのコンプレッサーホールにオープン。
1997	Design Zentrum Nordrhein Westfalen が、建築家ノーマン・フォスター（Lord Norman Foster）によって改修されたボイラーハウスに移転。今日では Red Dot Design Museum が入っている。
1998	ツォルフェライン・コークス工場の改修工事が開始される。ツォルフェライン財団（Stiftung Zollverein）が設立される。2008 年からこの財団が世界遺産となった場所でのすべてのアクティビティを管理している。
2001	ツォルフェライン第 12 採掘坑、第１／２／８採掘坑、コークス工場が UNESCO 世界遺産に登録される。同年、レム・コールハース（Rem Koolhaas）によるマスタープランおよび経営計画に基づいて、施設の開発が開始される。
2003	選炭場の拡張改修が開始される。建築家は、ロッテルダムのレム・コールハースの建築事務所とエッセンのボル（Boll）とクラベル（Krabel）が担当。
2006	新しい建物として SANAA ビルが加わる。創造産業の企業が第１／２／８採掘坑において、“Designstadt No1”を設立。
2010	ルール地方が欧州文化都市に指定され、ツォルフェラインは国際的な文化と創造産業の中心として重要な役割を果たす。ルール・ミュージアム、ビジターセンター、産業遺産ポータル、モニュメント回廊（Denkmmaslpfad Zollverein）がオープン。

[3] Stiftung Zollverein パンフレット ”Zollverein UNESCO World Heritage Site – The culture heart of the Ruhr Area”の Chronicle of the Zollverein World Heritage Site を筆者が翻訳・一部要約して作成。

ことが試みられた」（太下 2014: 181）。特に、ツォルフェライン炭鉱遺産は欧州文化首都2010 ルールのランドマークとなり、この地域一帯がルール地帯のメトロポリスへと転換したことを象徴的に示すこととなった。この事業が開始されたことにより、「1999 年に終了した IBA エムシャーパーク事業を継続的に発展させていくスキームとなり、そのなかで近代化産業遺産の保存と芸術文化の創造は重要な位置を占めている」（椎原 2014: 11）と考えられる。こうしてツォルフェライン炭鉱は、歴史、文化、エンターテイメント、レクリエーション、ガストロノミーを提供する空間に転換され、現在では年間 150 万人が訪れる場となっている。

４．ツォルフェライン炭鉱遺産のいま

かつて欧州最大であったこの炭鉱は、現在「産業遺産」となり、文化、デザイン、工芸、建築などの創造産業の拠点となっている。本節では、ツォルフェライン世界遺産の現在の様子を紹介しよう[4]。

世界遺産となっているのは、第 12 坑、第１／２／８坑、そしてコークス工場を含む 100ha に広がるエリアである。このエリアは、大きく分けて３つのエリアに分けられている。南側に位置する「A：第 12 坑エリア」、東側の「B：第１／２／８坑エリア」、北西側の「C：コークス工場」である（図３）。そのうち、文化的施設が多く配置されているのが A エリアと C エリアである。以下では A エリアと C エリアを中心に紹介する。

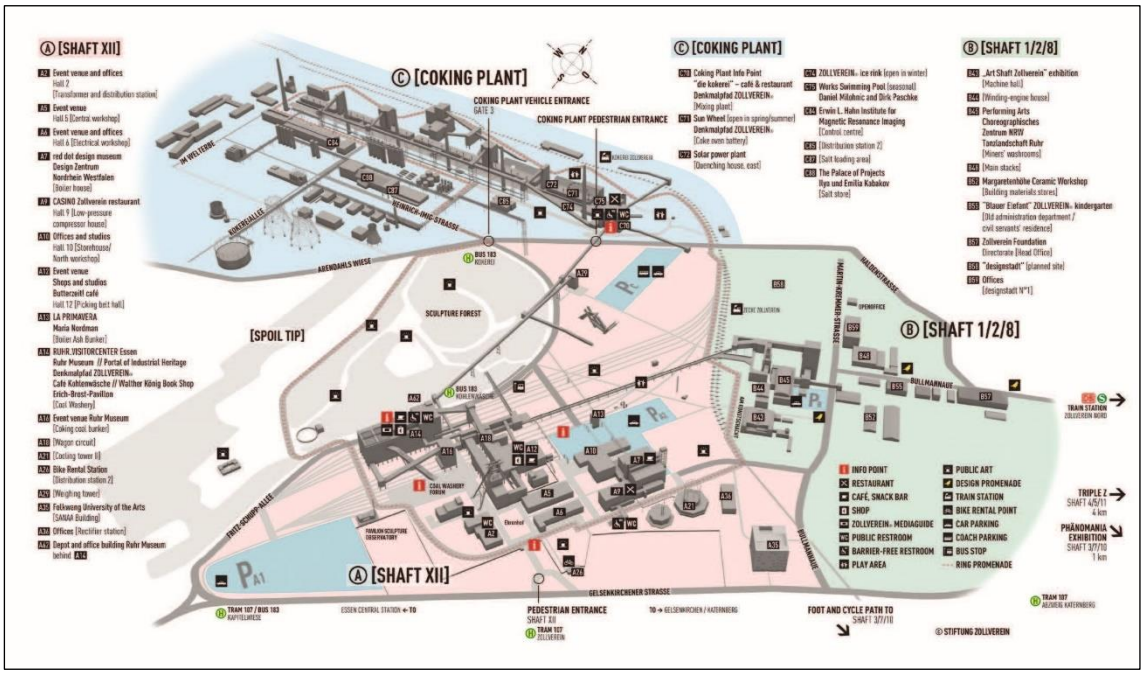

図３　ツォルフェライン世界遺産全体の地図[5]

[4] 本稿で使用した写真はすべて 2016 年３月 12 日に筆者が撮影したものである。
[5] Stiftung Zollverein パンフレット ”Zollverein UNESCO World Heritage Site – The culture heart of the Ruhr Area”より転載。

【A：第 12 坑エリア】

「A：第 12 坑エリア」は、一般訪問客のエントランスとなっており、正面に２本脚の竪坑櫓が出迎える（写真１）。このエリアには、長さ 90m、幅 30m、高さ 40mのこの炭鉱で最大の建造物であり、操業当時には選別、分級、貯炭、混炭などを担っていた選炭場がある。炭鉱閉鎖後、レム・コールハース（Rem Koolhaas）率いる組織 OMA が炭鉱跡地を現代的に利活用するためのマスタープランを策定して選炭場のリノベーションを担い、現在はビジターセンターやルール・ミュージアムが開館している。第 12 坑のボイラー室であった建物は、1996 年にノーマン・フォスター（Norman Foster）によってリノベーションが行われ、現在は世界最大の現代デザインの展示場を有するレッド・ドット・デザイン・ミュージアムとして使われている。

図４は、かつての選炭場であった建物の現在のフロアマップである。地上からエスカレータを上がると（写真２・３・４）、地上 24mの５階のフロアに到着する。この地上 24m フロアにはビジターセンター、ミュージアムのエントランス、ミュージアムショップやカフェがある。

写真１　世界で最も美しいと称される第 12 坑

写真２　ミュージアム入り口

写真３　選炭場の正面。真ん中にミュージアムへとつながるエスカレータがある。右手の棟はレッド・ドット・デザイン・ミュージアム。

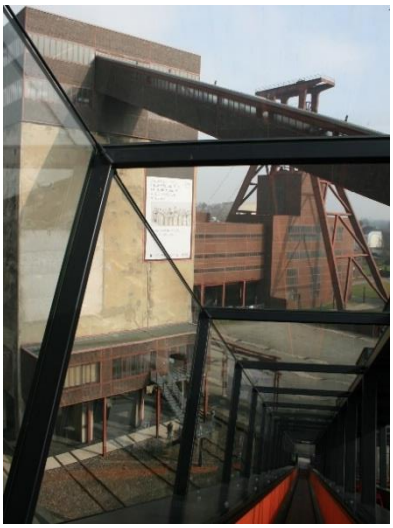

写真４　エスカレータからの景色

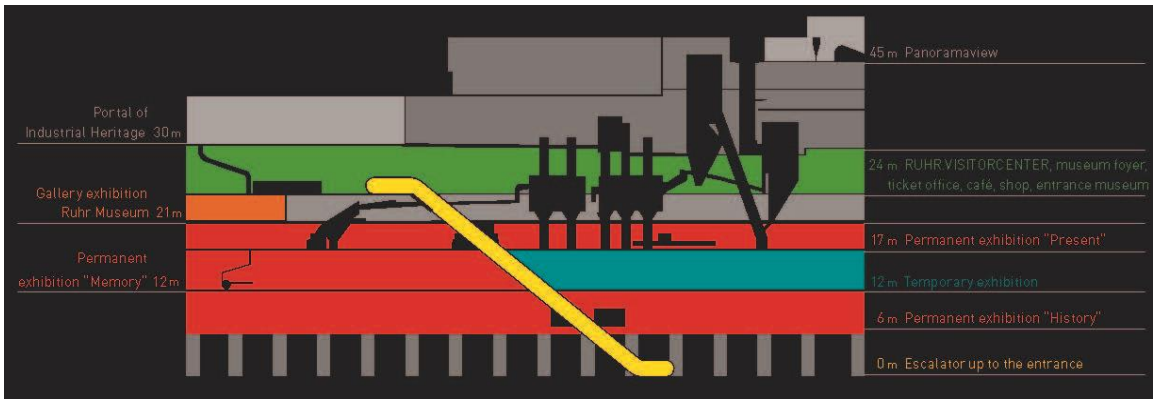

図４　選炭工場の現在のフロアマップ[6]

ルール・ミュージアムは、ルール都市圏の記憶として 6,000 点以上の展示物を有し、ルール地方の自然史と文化史を展示している。常設展示では、3,000 万年前の石炭形成から現在のルール都市圏の形成に至る社会構造の変容に至るまで、ルール地方の全歴史を扱っており、「現在」「前工業化時代の記憶」「地域の歴史」の順で３つのフロアに分けて展示している。常設展の設計は建築家ハンス・ギュンター・メルツ（Hans Günter Merz）が担い、展示物の内容を建物の既存の構造に統合して設計された。常設展示のほかに、定期的に特別展示が開催されている。

まずの地上 17mの「現在」のフロアでは、時代的に現在から過去に遡ってルール地方 Ruhrgebiet の歴史が解説されている。というのも、ルール地方というのは、自然環境的、政治的、あるいは行政的に明確に区分されている地域ではないために、様々な地形があり、時に矛盾も含む地域的特徴があるので、最初に訪問者にこの地域がどういう地域かを学んでもらうことが重要だと考えているからだという。ここはもともと岩石と石炭を選別するための巨大な機械が置かれたフロアであった。展示は多数の写真による解説が中心となっており、この地域の文化や伝統、宗教、サッカーやテレビ番組などの娯楽、人々の生活様式、人口構造など、近現代の地域の姿を理解できるような構成となっている。なかには、

写真５　生活のにおいをかぐことができる装置

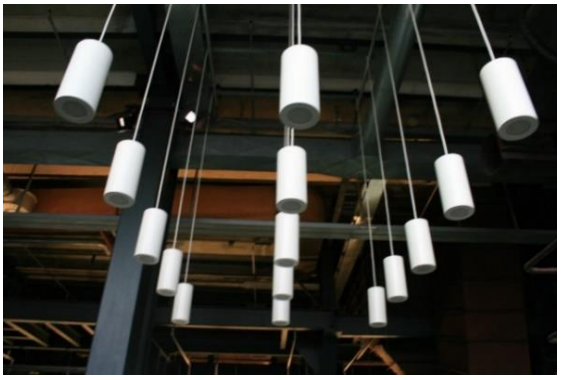

写真６　生活の音を聞ける装置

[6] The Ruhr Museum パンフレット “The Ruhr Museum at Zollverein in Essen”より転載。

石炭・鉄鋼産業従事者の生活のにおいを表現した装置（写真５）や、生活の音を聞くことができるオーディオ装置（写真６）なども置かれ、石炭産業を主軸とする地域の記憶を、五感を通して学べる工夫も見られた。

一つ階を降りた地上 12mの「記憶」のフロアは、かつて岩石、水、そして石炭が一時保管されていた場所で、現在はルール地方の産業化以前の歴史が解説されている。ルール地方は、古代や中世の様々な伝統を誇る地域であり、この地域に関する地質学的、考古学的、民族学的に重要な埋蔵物が展示されている。さらに１階下がった地上６ｍの「歴史」のフロアでは、今から 200 年以上前に始まった産業化、そして農業地帯から大規模な鉄と石炭の生産地への転換、そして近代的な経済的中心となったルール都市圏の形成という大規模な地域変動が解説されている。産業化、鉱石製錬、工業化の最盛期到来、２つの世界大戦間に生じた大規模な破壊、戦後復興、そして化石燃料消費の幕開けまでの歴史が展示されている。

残念ながら、時間の都合上、筆者は参加することができなかったが、ミュージアム内のガイドツアーも開催されている。その内容は、３億年前の石炭の起源から近年のルール都市圏の構造的変化に至るまで、炭鉱エリアの自然史および文化史を１時間半で解説するものである。参加料金は１人３ユーロで、平日は１日１回、土日祝日は１日２回催行されている。

そして地上 30mフロアに上ると、「産業遺産ポータル」がある。この場所は、マルチメディアを用いた情報端末があり、映像、テキスト、音を駆使して産業時代のモニュメントを感じられる仕掛けとなっている。そして同じフロアに第 12 坑の一部が保存されており、巨大な機械やコンベイヤーベルトが並ぶ脇の通路を進むと（写真７・８）、地上 45mフロアにある選炭場の屋上に出ることができる。そこからは、炭鉱やコークス工場だけではなく周辺地域全体を見渡すことができる（写真９・10）。

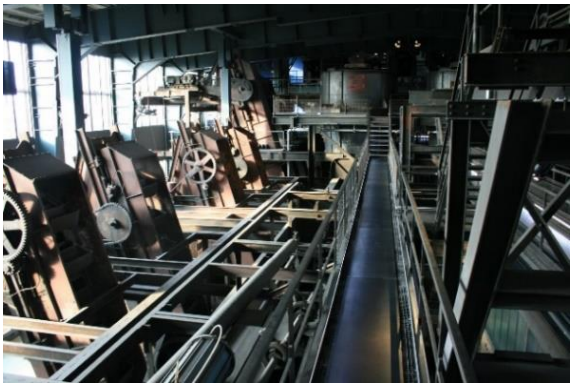

写真 7　地上 30m フロアの機械群

写真 8　地上 30m フロアの機械群

写真９　地上 45m ﾌﾛｱの屋上から見下ろしたﾂｫﾙﾌｪﾗｲﾝ炭鉱

写真 10　地上 45m フロアの屋上から見える周辺地域

【B：第１／２／８坑エリア】

このエリアは､比較的建物が少なく､面積的にもＡエリアやＣエリアより小規模である。かつてこのエリアには、炭鉱労働者の坑口浴場や管理部門、公務員宿舎などが置かれていたが､現在それらの建物はツォルフェライン財団をはじめとするオフィスや､陶器工作室、展示室、パフォーミングアートセンターなどとして使用されている。建物の周辺では、炭鉱で使われていた機材等が展示物として置かれていたり（写真 11)、A エリアへと続く道を進むとかつて使用されていた線路が残されているなど（写真 12)、炭鉱の雰囲気を感じさせる空間となっている。

写真 11　B エリア入り口付近に置かれた展示物

写真 12　エリア全体にかつての線路が残されている

【C：コークス工場エリア】

コークス工場は、世界遺産エリアの北西側にある。かつては、約 1,000 人の労働者が従事し、１日 8,500 トンのコークスを生産していた場所である。A エリアからはコークス工場に至るまでの道中には｢彫刻の森｣があり､彫刻作品や機械などが屋外に置かれている。その「彫刻の森」を通過して 10 分ほど歩くと、コークス工場の入り口に到着する。このコークス工場は巨大な工場群である（写真 13・14)。工場の解説パネルなどはあまり置かれておらず工場について学ぶ場にはなっていないように感じたが、示された順路に従いながら、パイプの下を通ったり、工場建物の内部を覗きながら（写真 15)、迫力ある巨大な施設を間近に見学することができる。まだ一部には改修工事がすすめられている箇所や、未改修部分も残されていた。

このエリアにもカフェやレストラン、展示室などが設けられている。コークス工場の石炭混合設備のあった場所がカフェ・レストラン Kokerei Café&Restaurant となっており、石炭混合設備や複数のコークス炉が並ぶ様子そのものを見ることができ、残された古い機械がバーカウンターとして使用されるなど、産業遺産を間近に感じながら食事などを楽しむことができるようである。また、かつて塩化物と硫酸の貯蔵庫であった場所では、2001 年にロシアのイリア＆エミリア・カバコフ（Ilya & Emilia Kabakov）による「プロジェクト宮殿（The Palace of Projects）」がオープンし、「カタツムリのような螺旋の建物のなかに多数の展示室が設けられ、そこにはソ連で暮らす様々な人々の夢想した 65 のプロジェクトが展示されている」（椎原 2014: 10）。この空間はワークショップや会議などにも使用される。さらに、2001 年のアートプロジェクトの一環としてコークス工場にスイミングプールがオープンし、現在も夏季限定で利用することができる。また、コークス炉に沿って長さ 150m におよぶアイススケートリンクもあり、冬季限定でオープンしている。

工場裏側の歩道を進むと（写真 16）、再び彫刻作品が展示されており、木々と工場と彫刻作品の間を歩きながら芸術と産業遺産を楽しむことができるようになっている。歩道の奥にはかつての列車の駅舎も残されていた。寒い時期の平日ということもあってか、それほど多くの観光客はいなかったが、このエリアでは地元の人と思われる人々が夕方の散歩を楽しむ姿が見られた。

写真 13　コークス工場の様子

写真 14　コークス工場の様子

写真 15　コークス工場内部の様子

写真 16　工場脇の歩道

上記３つのエリアからなるツォルフェライン炭鉱世界遺産では、老若男女が石炭産業や地域の歴史について学ぶことができる様々なガイドツアーが組まれている。以下はその例である。

例えば、「ツォルフェライン・モニュメント回廊（Denkmalpfad ZOLLVEREIN）」ツアーでは、石炭の生産過程を学ぶことができる。ツォルフェライン炭鉱及びコークス工場では、それぞれのホールや部屋が稼働当時とほぼ同じ状態で保存されており、それらを結ぶ「石炭の道（Path of the Coal」が「ツォルフェライン・モニュメント回廊」となって整備されている。その回廊では、石炭の採掘から重工業の生産の初期段階に至るまでが再現されており、この回廊を巡るガイドツアーではその一連の過程を見学することができる。このツアーに参加するには事前申し込みが必要で、参加費は一般９ユーロ、５～18 歳は４ユーロ、大人２人と子ども用家族チケットは 20 ユーロ、大人１人と子ども用家族チケットは 12 ユーロとなっている。また「石炭と炭鉱夫について」というツアーでは、シャフトホールを出発し、スクリーニングプラント、そして積み込み場までの過程を見学する。屋外エリアでは、建物の建築様式、自然、そして炭鉱から近代的文化センターへと転換したツォルフェラインを多面的に知ることができる。平日は１日３回、土日祝日は午前 11 時から午後５時まで毎時催行され、午後３時には英語でのツアーも行われている。さらに、「コークス炉とベンチギャラリー」のツアーではコークス工場での石炭の搬入からコークス化までのプロセスを学ぶことができる。石炭が第２段階としてたどる、石炭混合設備とコンベイヤーから巨大なコークス炉へと石炭が運ばれる過程を見学し、コークス工場の歴史と技術について学ぶことができる。そのほか、５歳以上の子どもとその家族向けに、石炭がコークスになるプロセスを学ぶツアーなどが準備されている。

５．むすびにかえて

本稿では、ツォルフェライン炭鉱の歴史を概観したうえで、石炭産業が閉鎖された後に炭鉱跡地がどのように保存・継承されてきたのか、そして世界遺産登録された炭鉱遺産群が現在どのように利活用されているのかを現地訪問記として紹介してきた。この炭鉱遺産群が保存された背景には、大規模な基幹産業が終焉を迎えた後の新たな産業および雇用の創出という大きな地域課題に対応せざるをえない状況があったことはもちろんだが、同時にバウハウス様式で設計された第 12 坑が世界的な建築的価値を認められたことがあったことも重要な転換点だったと考えられる。

また、単に地域の記憶として炭鉱遺産群を保存するだけではなく、大規模な都市再開発や都市政策のなかに炭鉱遺産が位置付けられていることも産業遺産の保存・利活用を促進する大きな要因になっているといえるだろう。実際、NW 州では特に工業衰退が顕著であった 1978 年～1980 年に失業率が大幅に上昇したが、早くから地域経済の復興策として文化・創造産業に注目しており、同州における文化経済は 1980 年代末から成長し始め、1980 年には 4.59 億ドイツマルクだったが 1994 年には 14.4 億ドイツマルクへと増大している（池田 2016: 172）。

さらに、産業遺産の保存が石炭産業や地域の歴史を学ぶという社会教育的な意義や、世界遺産ゆえに外部からの観光客向けの施設としての価値にとどまらず、現代的なアートや文化、大衆向けの娯楽と結びついているために、この遺産群が地域生活のなかに溶け込み、

地域の新しいイメージを作り出している様相を見ることもできる。

エネルギー転換を機に石炭産業が終わりを迎えた後、その地域がどのように新しい未来を展望し、どのような方策を選ぶのか。個人的には、日本の被災地から離れ、同じ炭鉱跡地に立ち、東日本大震災の被災地域で見聞きしている現状の意味を改めて問う機会となった。

付記

本論は、早稲田大学総合人文科学研究センター「知の蓄積と活用にむけた方法論的研究」部門第 9 回研究会（2016 年 12 月 1 日開催：早稲田大学大学院社会学院生研究会との共催）報告にもとづくものである。

参考文献

ICOMOS, 2001, “Advisory Body Evaluation” （http://whc.unesco.org/document/154732）2017 年 1 月 20 日閲覧.

池田真利子, 2016,「ドイツにおける文化創造産業と政策――連邦州別の政策策定経緯に着目して」『E-Journal GEO』11(1): 164-85.

鐘築梓, 2006,「ルール工業地帯の産業遺産を再生」『ジェトロセンサー』5: 20.

太下義之, 2014,「国際的な文化事業による創造的な都市・地域整備に関する研究――『欧州文化首都』から『東アジア文化都市』へ」『季刊政策・経営研究』2: 171-93.

椎原伸博, 2014,「近代化産業遺産と現代アート――IBA エムシャーパーク事業における現代アートの役割」『「近代化産業遺産」の「記憶」に関する芸術学的研究：平成 25 年度実践女子学園教育研究振興基金助成金による研究プロジェクト報告書』, 2-21.

UNESCO World Heritage Convention, 2001, “World Heritage Convention Documentation Nomination File 975” (http://whc.unesco.org/uploads/nominations/975.pdf) 2017 年 1 月 20 日閲覧.

参考資料

Stiftung Zollverein パンフレット ”Zollverein UNESCO World Heritage Site – The culture heart of the Ruhr Area”

The Ruhr Museum パンフレット “The Ruhr Museum at Zollverein in Essen”